

池田文書の研究(十)

池田文書研究会

伊東方成の書簡について

一、伊東方成の略歴

方成は、宮内省侍医、内科・眼科医。天保三年九月十五日(侍医寮編『軼免物故履歴書』)によれば天保五年十二月十五日相模高座郡上溝村の医師鈴木方策の長男として生まれる。名は初称謙蔵、のち玄昌、玄白、さらに維新後方成と改める。嘉永二年二月伊東玄朴の塾に入門、蘭方を修め一時阿波侯に仕えるが、万延元年十二月玄朴の二女と結婚し養嗣子となる。文久元年四月幕府奥医師見習となり、同年十月長崎に留学、ポンペについて医学伝習をうける。文久二年六月ポンペの帰国に随行してオランダに留学。

明治元年十一月帰国し、維新政府に出仕、同年十二月図書少允に任ぜられ、典薬寮医師に補せられる。明治二年八月大学中博士、同年九月大典医に任ぜられる。明治三年九月侍医規則取調御用となり、同年閏十月ボードウインの推薦により再渡欧。オランダのユトレヒト大学に留学しドンデルスに師事して眼科を学び、のちドイツに留学。留学中の明治四年八月大侍医に任ぜられる。明治七年四月帰国、同年九月権典侍

柳原愛子(大正天皇生母)の妊娠御用掛となり、同年十一月少典医に任ぜられる。

明治八年一月官制改革により典医を廃され三等侍医に任ぜられ、ついで同年五月二等侍医をへて、明治十年十月一等侍医に累進。明治十九年二月官制改革により侍医に任ぜられる。明治二十年五月賜暇により渡欧し医学研究、二十二年二月帰国。明治二十四年二月池田謙齋不在中、侍医局長代理となるが、同年五月侍医免職、宮内省御用掛となる。明治二十九年二月宮中顧問官に任ぜられるが、明治三十一年五月二日没、年六十七(谷中天龍院の過去帳によれば行年六十六)。

方成は、オランダに留学中ランドルトとともに周辺視力の研究を行ない下方が最良なることを発見。明治六年スネレンの視力表修正した和文の視力表を作ったがあまり行われなかつた。また、明治医界の中心にあり乙酉会会員。

(参考文献・伊東栄著『伊東玄朴傳』(大正五年)、侍医寮編『軼免物故履歴書』(明治二十一、昭和十三年)、宇山安夫『わが銀海のバイオニア』(昭和四十八年))

二、方成の書簡

方成と謙齋とは、明治初年の典医局時代から侍医としてともに三十年の長きにわたり勤仕した同僚であり、二人によって明治初中期の侍医局が主導されたといつて過言ではない。方成のほうが九歳年上の先輩であり、はじめ方成が侍医局の頭(局長)であったが、明治十九年謙齋が侍医局長官に就任して、その地位は逆転する。

方成の書簡は三十三通を数えるが、一通(書簡一七三)を除いてすべてこの明治十九年以前、方成が上官時代のものであることは興味深い。書簡の内容はほぼ侍医局勤務、患者病用に関するもので占められている。

書簡一八四は、最も早い時期のもので明治九年、謙斎のドイツ留学から帰国直後、侍医局勤務の日割が決まる直前の状況を伝えている。

書簡一八二・一八七・一六一・一七五・一六八・一八五には明治天皇の明治十四年東北・北海道巡幸時をはじめそれ以降の容態や治療について記されている。同じく明治皇后の容態については書簡一八三・一六二・一七三に、英照皇太后については書簡一七一および一七七に記されている。

書簡一五五・一八八・一五六は岩倉具視の重態を伝えるもので、死の直前の容態の詳細がみえる。その他、作間一介・大久保(利通)・吉原重俊・西郷従道・大山(巖)ら政府高官の家族病用がそれぞれ書簡一八四・一八六・一八一・一六〇・一七四に出ている。

書簡一六三は、明治十七年のベルツの一時帰国時、その代員として東京大学医学部がオランダ人ヘーデンを採用したことに、方成の推薦があったことを伝えている。

(遠藤正治)

1 明治(九)年七月八日

一八四 伊東方成 池田謙斎

拜啓、久々御無音背本意候、然は宮内省御出頭日、万里小路殿え申出候処、右宮内御兼勤日割之儀、還行之上御治定相成可申候間、此段尊兄え可申上旨過日被申聞候、右之段早々御答可仕之処、等閑ニ打過候段恐縮之至り奉存候、作間一介小児過日御高診被下候由原氏より承知仕候、小生過日一診仕候、右吐乳は、マーヘンカタル及ヒ生齒ノミの事ニ有之間敷被存候、過日も少々ストイブ之気味有之、且つ生育も大ニ後れ、其上此節は時々発熱、先日一診候節はホンタ子ル大ニ硬脹、惣シテ気先も鬱閉致候ニ付、小生拙案ニは、所謂メニンヒチユス、チュベルキユロシス、バシラーリス之下地ニは有之間敷哉、右作間氏とハ久々知己之仁ニて、一昨年も小児を失ひ候仕合ニて、此度も深ク心痛致候間、尚御序之節御高診被下候様自小生奉願候、長谷川某と申齒医師之宿所書紛失仕候、乍御手数郵便ニて被仰越被下候様奉願上候、右願用迄、何れ不日拝眉万舌可申上候、草々頓首

七月八日

メ

池田先生 侍史

伊東方成

(田中)

(一) 万里小路……万里小路博房。明治四年七月から十年八月まで宮内大輔。文政七年六月生。明治十七年二月没、年六十一。権中納言正二位。

(二) 作間一介……長州出身。明治九年正院少史。のち大政官大書記官。

(三) マーヘンカタル……Magen-Katarrh 胃カタル

(四) ストイブ……stopfen 便秘する。

(五) ホンタ子ル……Fontanelle 泉門。

(六) メニンヒチユス、チュベルキュロシス、バシラーリス……Meningitis tuberculosis basilaris 結核性脳膜炎。

(七) 「宮内御兼勤日割之儀」とあるので謙齋がドイツ留学から帰朝した明治九年の書簡と推定される。

2 明治(十)十一月四月八日

一八六 伊東方成 池田謙齋

尔後益御安靜奉拝賀候、然ハ過日は御多用中大久保下屋敷^(一)へ御見舞被下、遠方御苦勞千万ニ奉存候、小生も一昨六日見舞申候、御施術後夜間安眠、発熱等無之、氣先も一段爽快を覚候由ニて病門大悦ニ御座候、尚今朝之報知ニて、尔後更ニ異状無之趣上屋敷へ申来候、附ては追々順快ニ相趣候義とは存候得共、兩三日中御差繰尚御一診も被下候ハ、先方別而安心被成候事と奉存候、大久保殿昨夜帰京、今朝面会、下屋敷御病者之儀ニ付委細申通置候、且又牧野老母一昨日御示之通

りヒヨスエキス曹達等之散薬を投し、カンフル剤を止め、少量之赤葡萄酒于今奨致し候、為差異状無之候、右申上度、余は拜光ニ讓候、草々頓首

四月八日 方成

池田謙齋様 侍史

(田中)

3 明治 年四月二十七日

一八一 伊東方成 池田謙齋

(一) 大久保……内務卿大久保利通。明治十一年五月東京紀尾井坂で暗殺される。
(二) 大久保利通が暗殺される以前の明治十、十一年頃と推定される。

拜啓仕候、然は過日一寸申上候宇下霞ケ関^(一)吉原大書記官奥方、モラ、スワンゲルシヤフトニて昨夕分婉、尔後異状も無之候処、只今一診候処胞衣様之物多分残り居候間、直ニ摘出候得共、未タ全ク取除き不申、尚残物有之候処、小生今日当直^(二)只今、何分後之施術も難相成候ニ付、突然相願兼候得共、御繰合今日御見舞御施術被下候様奉願上候、病門ハ不申及小生より萬々御依頼申上候、昨日方経過等は由良方御聞取被下度奉願上候、取急草々頓首

四月廿七日 方成

池田老台閣下

(田中)

(一) 吉原大書記官……吉原重俊、旧薩摩藩士。明治十年大政官
法制局大書記官兼大蔵省租税局大書記官。明治十三年大
蔵省少輔。明治十七年十二月日本銀行總裁。明治二十年十
二月没、年四十三。

(二) モラ、スワンゲルシヤフト…… Mole Schwangerschaft
奇胎妊娠。

(三) 吉原大書記官とあるので注(一)より明治十年から十二年
の間と推定される。

4 明治(十)年七月七日

一八三 伊東方成・山川幸喜 池田謙斎

皇后宮昨日来少々御感冒之御気味にて御咽喉少々御イラ／＼
被遊、午後より御逆上御全身御倦怠被為覺、当番高階氏拝診、
昨夕方御飯床御温保頼置候得共、為差御事ニは不被為在候義
(中欠)

体温三十八度八分弱

脈 九十六

呼吸三十二

昨夜御拜聴仕候通りキニー子十五尺ノ丸薬兩度ニ差上候、召
上り物は随分御勉強被致午前一時過方只今迄米煎藁合四勺ソ
ップ五勺梅酒二勺五才ヒーフチー少々被食候、今朝は何とな
く御気先ハ不宜様相伺申候、

○今午後八時宮内省よりベルツ氏御差向ニ相成候間、御繰合
せて何卒其節御来診被下候様奉願上候、書余讓拜芝候也、
七月十日午前九時半

伊東方成
山川幸喜

池田先生

机下

〔遠藤〕

(一) 山川幸喜が小文字で連署しているので、幸喜が侍医局医
員であった明治十年と推定される。

5 明治(十二)年二月二十八日

一七八 伊東方成 池田謙斎

拜啓、時下余寒退兼候処、益御佳適可被為在奉大賀候、陳者
来ル二日(即日)午後困暮小集会相催し候間、何卒御繰合被下
午後早々より御尊来被下度奉希上候、頓首

二月廿八日

伊東方成

池田謙斎様 侍史

〔田中〕

(二) 来ル二日が日曜日とあるので、三月二日が日曜日である
明治十二年と推定される。

6 明治十二年三月一日

一八〇 伊東方成 池田謙齋

拜啓、益御清迪奉恭喜候、然は明二日囲基会相催候旨御案内申上置候処、当方少々差支出来、明後三日ニ延会仕候間、二日ハ御見合被下、何卒御差練を以来ル三日午後早々御尊来被下度、此段更ニ奉希上候、誠ニ勝手之段宜御宥恕奉仰上候、右御依頼申上度草々頓首

三月一日

伊東方成

池田謙齋様 侍史

〔田中〕

(一) 前簡178に続く内容であり、明治十二年と推定される。

7 明治十四年八月二十八日

一八二 伊東方成 池田謙齋

(封筒表) 駿河台南甲賀町十五番地 池田謙齋殿閣下

(封筒裏) 永田町一丁目十七番地 伊東方成留守宅ヨリ 九月六日

六日 スタンプほ東京 一四・九・六

八月六日附之尊書拝読仕候、残暑難堪御座候処、聖上益御機嫌能、昨廿二日青森行在所に着御、今般之御巡幸余程御盛之御事にて、御乗車難相成坂路等ハ御乗馬被遊、是迄一回も御乗輿不被為在、至極御壯健被遊御座御同然難有奉存候、

一皇女御降誕被遊恐悦至極奉存候、皇女御発育如何之御義ニ付、先般御問合申入候処、委細御廻答被下候二付、其段卿・輔^(四)え開申仕候間左様御承知可被下候、尊兄ニは御眼疾兎角不

宜、御引入御療養中、御降誕御用にて御無理御配慮被成候処、又々御再発、御困難被成候趣、当今ニ至り如何被為入候哉、微タル結膜炎兎角慢性ニ傾き易く万一角膜炎等之合併ハ如何可有之哉と御案事申上候、御留主中故緩々御保養御全治之程奉祈候、

道中更ニ奇談もなく、東京御発遣已来非常之炎熱難堪相覚候処、昨今ハ稍薄らき、朝夕少々凌易候、明廿九日御乗船、北海道へ御巡幸被遊候御事ニ御座候、

供奉侍医局一行も先づ無事ニ罷在候、大限参議殿出立後六・七日ハ少々頭痛ニ被苦候由、此頃ニ至り道中ニ被馴候歟、至て壯健ニ見請候、先は右申上度、且つ御眼氣御見舞迄呈寸志候、草々頓首拝具

八月廿八日

伊東方成

池田謙齋様 侍史

乍末筆奥方始皆様え宜敷御伝声奉煩候也 〔田中〕

(二) 青森行在所に着御……明治天皇が明治十四年七月三十日東北・北海道視察に出発し青森に到着したことをさす。帰還は十月十一日。この帰還直後いわゆる明治十四年の政変が起り、岩倉具視が伊藤博文、井上馨らとはかり大限重信一派を追放した。

(一) 皇女……第三皇女^{おとぎ}留子内親王滋宮。明治十四年八月三日誕生、明治十六年九月六日薨去。母千種任子。

(二) 卿……宮内卿徳大寺実則。

(三) 輔……宮内大輔杉孫七郎。

8 明治(十六)年三月七日

一六二 伊東方成 池田謙齋

拝呈、皇后宮昨日午後方御感冒之御容体にて御仮床ニ被為成、当番盛貞[○]拝診被仰付候処、御増寒、御頭痛、御熱氣も被為在候ニ付、御葉調進、昨夕御格子[○]拝診仕候処、御夕御膳御召上りも不被為在、御相応御熱候被為入、御脈百十程ニ相診候程之御容体ニ候間、今朝拝診出頭可致旨早天申越候ニ付、即チ午前八時出頭拝診仕候処、御熱候、御増寒、御頭痛等御減少、御脈八十、惣て昨夜方御軽快ニ被為成候得共、今朝来御咽喉御刺衝、御嗽漱少々被為出、全ク御感冒之御容体と奉診候、依之カミル浸中ミソデレリ精ラウールケルス水等之水薬調献仕置候、右之御容体ニ被為入候間、貴官乍御苦勞明朝朝拝診御出頭可被下候、小生義ハ明日当直ニ付朝拝診出頭不仕候、岩佐明朝出頭可仕候、右申上度如此御座候也

三月七日 伊東方成

池田謙齋様

尚々岩佐氏今朝九時前出頭致候、右時刻御参り被下度奉願候、已上 (田中)

(一) (伊東) 盛貞[○]拝診とあるので、盛貞の侍医局在勤中の明治十六年以前の書簡と推定される。

9 明治十六年三月十七日

一八七 伊東方成 池田謙齋

(封筒) 池田一等侍医殿 拝復 伊東方成

拝見仕候、御当番御苦勞奉存候、然ハ御上益御機嫌御宜、御疼痛全ク御快復被為成候ニ付、御水薬御免御願、御丸薬御調献之趣委細御示し被下散葉仕候、於小官御同意ニ御座候間、明日ニも御調進被下候様仕度候、扱又盛貞殿今日方出勤被致候ニ付、来ル廿二日御番之処、盛貞殿廿三日之番と御繰替被成候趣拝承仕候、小官事過日申上候小集團基会、弥来ル二十四日^{土曜}ニ相催候間、何卒御繰合同日午後三時より御来臨奉願候、尤も一兩日中以書面御案内可申上候得共、御都合も御座候半と奉存候間、一応先以申上置候、右御請旁右之段申上候、敬白

三月十七日 伊東方成

池田一等侍医殿

(田中)

(一) 盛貞……伊東盛貞。方成の義兄、名は玄信、字は文仲、号は貫齋。文政九年生。適塾に学び、のち伊東玄朴の養子と

なり分家。幕府奥医師。明治三年中典医、明治八年五等侍医、明治九年四等侍医、十年十月三等侍医となる。明治十六年十一月病のため退任、明治二十六年没、年六十八。ハリスの重病を治したことで名をあげた。

(二) 二十四日土曜日、池田一等侍医とあるので明治十六年と推定される。

10 明治(十六)年五月十八日

一六一 伊東方成 池田謙齋

(封筒) 池田一等侍医殿 侍医局伊東方成 公用、不要貴答

拝呈仕候、然ハ今朝拜診済、^{平也}聖上御事少々御腹痛被為遊候二付、右御手当白き御粉薬調猷致候様御沙汰之旨、桐命婦申出候二付、御常用御丸薬中ラバル末を除き調猷、扱白き御粉薬、御腹痛之節調進候事ハ無之、乍去一昨午御巡幸之節御腹痛被為入候折、重曹ソソク油糟之御散薬差上候事有之候哉ニ相心得候間、右之御散薬調猷仕候、尤も今朝拜診之節御脈候其外更ニ御異状不奉伺候、今朝御軟便御多量御一行被為在、御腹痛御輕微之御事と奉存候得共、尚午后一時半過御内儀にて御容体伺候処、其後折々御腹痛被為在候哉の御様子見上、御仮床被為成、御便通尚又被為在候由ニ付拜見仕候処、此度ハ御滑便下痢中量御一行被為在候、今朝来御腹痛御下痢被為在候ハ時氣ニ御感じ被遊候様奉存候間、一応拜診被仰付候様菊命

婦ヲ以て申入候処、拜診ハ不被仰付候との御事候間、御薬加減調猷、即チ輕量之ドーフルス散ヲ丸トシ分ニ包及ヒコロソ没調猷仕候、本日ハ竹内殿上直ニ付、小生明朝拜診出頭可仕候間、左様御承知可被下候、先は特別之御事ニハ不被為入候得共、為御承知此段御通知申上置候也

五月十八日

伊東方成

池田一等侍医殿

(田中)

(一) 一昨午御巡幸之節……明治十四年の東北・北海道巡幸をさすか。

(二) 竹内……竹内正信、侍医。

(三) 注(一)より明治十六年の書簡か。

11 明治(十六)年六月二十四日

一五五 伊東方成 池田謙齋

一書拜啓仕候、時下薄暑之節御座候処益御清祥奉恐賀候、然ハ尔後尊恙如何被為入候哉、御案事申上候、折角御自愛專一ニ奉折上候、右大臣公御胸痛ハ去ル十一日より稍御増進之処、押て遠方え御出向、十二日も同断御他出被成候処、夜中痛甚敷、十三日も同断、夜間不眠、御疲労次第ニ相増し御顔貌頓ニ憔悴、呼吸不利、脈微細、声嘎等之御容体ト一時ハ御衰弱甚敷相見ハ、御痛追々胃部ニ蔓延、胃瘳様ニ相成り候由、井上参議殿・香川少輔殿ニも大ニ心配被致候処、十四日ニハ幸ニ

痛少々軽減、諸症稍鎮静、十五・十六兩日引続宜敷方ニハ候得共、此発動ニテ食物嘔下困難ニ相成候、併し胸痛・胃痛大ニ緩解候事故氣先も宜敷、多少疼痛増減ハ有之候得共、少々ツ、御步行被成機嫌宜敷候処、小生も十七日夕着京、先以御輕快ニテ大ニ安心仕候事共候、然ル二十八日〆頓ニ流動物之

飲下困難を覚え、心下圧重、神氣鬱閉、十九日ハ好物之酒少も通り不申、惣テ食欲決損、心下之苦悶弥甚敷、追々呼吸不利、脈細少、時々胃部ニ痛を覚え、不絶温巴布を貼し、廿日ニは頗ル虚脱之兆も相見え大ニ心痛罷在候、右容体ハ如何ニも子ルヘウセ、カルザアルギー症ト相考候ニ付、眞若エキス・モルヒ子之散薬ト共ニホルトウアイン等相投し候処、廿一日夕方より心下苦悶等之諸症少々、薄られ、又々頓ニソツプ、酒も少々、飲下出来、氣先も稍相復し、廿二日、廿三日嘔下大ニ宜敷く、今日ハ心下苦悶少々相殘候程ニ被申、朝より酒一合・ソツプ一合・粥五勺余り被食候、弥来ル廿六日神戸出帆之飛脚船ニテ御帰京被成候様決定被致、当地ハ明廿五日出発被致候事ニ御座候、出帆前右之御容体ニ付如何相成可申哉、甚苦慮罷在候処、幸ニ今日御輕快ニ被趣大ニ安心仕候、乍去神戸ヘ迄之氣車如何可有之哉、彼は心配罷在候、先は右荒増之御容体御通知申上度、余は帰京可申述候、折角時下御自重專一ニ奉折候、頓首

六月廿四日朝

伊東方成

池田謙齋様 侍史

〔田中〕

(一) 右大臣……岩倉具視。明治十六年ガン症にかかり、漸次重症となる。熱海、京都に病養するが効なく、六月東京に帰り、七月十八日辞職。七月二十日没、年五十九。明治天皇は具視の重病に際して侍医を遣わし治療にあたらせたとされる。

(二) 井上参議……井上馨。明治十一年参議兼工務卿、翌十二年外務卿に転ずる。

(三) 香川少輔……香川敬三。水戸藩士、天保十年生まれ。明治十五年十一月宮内少輔となる。皇后宮大夫。伯爵。大正四年没、年七十七。

(四) 子ルヘウセ、カルザアルギー症……Nervus Kardialgie. 神経性胃痙攣。

(五) 注(一)より明治十六年京都からの書簡と推定される。

12 明治(十六)年七月八日

一八八 伊東方成 池田謙齋

益御安寧奉賀候、陳は右大臣公昨夜は発熱之為御寝も被成兼、今朝御目覚後も御氣先不宜未夕伺も不致候、仍て乍御苦勞本日午後二時より三時迄之間ニ御来診被下度、此段頼上候、草々頓首

七月八日前八時過

伊東方成

池田謙齋君

〔田中〕

(一) 前簡55に続く内容であり、明治十六年と推定される。

は今夕参館可申上候、右不取敢御請申上候也

13 明治(十六)年七月十七日

一月十日
池田謙齋様

〔田中〕

一五六 伊東方成 池田二侍医

(一) ヘーデン……W.H. van der Heyden オランダ人医家、一

(封筒裏) 池田二侍医殿 無事不要貴答

(封筒裏) 緘 巖倉家にて 伊東方成

八七一年ユトレヒト大学卒業、明治七年来日。新潟病院で解剖学、生理学、病理学を担当。明治十年三月辞任して神戸病院に医学教師として赴任。明治十五年十月契約満期となり一時帰国。翌年十二月再来日。明治十七年ベルツ休暇帰国の後を受けて東京大学医学部で内科、産婦人科を担当。

右大臣公、午後四時半体温三十九度三分、脈百〇四、御気分ハ別段悪敷ハ不被為入候得共、昨日来折々咳嗽頻発、本日御食量昨日ニ比スレハ御少量、ベルツ例刻拜診、明朝十二氏機^(二)尼涅為丸分二包差上、鎮咳之為モルヒ子十二分^(三)氏丁溶液差上候事ニ御坐候、此段為御承知如此ニ御坐候、勿々

七月十七日午後九字半 伊東方成

池田謙齋君

〔田中〕

(二) ベルツ休暇帰国の代員について明治十七年一月九日付の三宅秀の書簡がある(書簡九三〇)。本簡は東京大学医学部でヘーデンを採用する際、伊東方成の推薦のあつたことを物語る。

(一) 機尼涅……キニーネ。
(二) 岩倉具視の病死三日前の書簡と推定される。

14 明治(十七)年一月十日

一六三 伊東方成 池田謙齋

拜読仕候、然ハ和蘭医、当時神戸在留^(一)ヘーデン氏、学力治療とも相応出来、人物ハ至て正直ナル者ニ御座候、同氏履歴等

池田文書 — 伊東方成書簡一覧 —

書簡番号	発信年月日 ()内推定	発信者名	受信者名	備考	
1	184	明治(9)年7月8日	伊東方成	池田先生	宮内省御兼勤日割之儀
2	186	明治 年4月8日	方成	池田謙斎様	大久保下屋敷御見舞
3	181	明治 年4月27日	方成	池田老台閣下	吉原大書記官奥方
4	183	明治(10)年7月10日	伊東方成 山川幸喜	池田先生	皇后宮御感冒
5	178	明治(12)年2月28日	伊東方成	池田謙斎様	囲碁小集会
6	180	明治(12)年3月1日	伊東方成	池田謙斎様	囲碁会延会
7	182	明治 14 年8月28日	伊東方成	池田謙斎様	聖上青森行在所え着
8	162	明治(16)年3月7日	伊東方成	池田謙斎様	皇后宮御感冒
9	187	明治(16)年3月17日	伊東方成	池田一等待医殿	御上益御機嫌
10	161	明治(16)年5月18日	伊東方成	池田一等待医殿	聖上御事
11	155	明治(16)年6月24日	伊東方成	池田謙斎様	右大臣公御胸痛
12	188	明治(16)年7月8日	伊東方成	池田謙斎君	右大臣公発熱
13	156	明治(16)年7月17日	伊東方成	池田謙斎君	右大臣公
14	163	明治(17)年1月10日	伊東方成	池田謙斎様	神戸在留ヘーデン氏
15	175	明治 年2月9日	伊東方成	池田一等待医殿	聖上御事
16	168	明治 年9月12日	伊東方成	池田謙斎殿	今朝御拝診
17	185	明治 年9月29日	伊東方成	池田謙斎殿	水揚酸丸葉御調献
18	167	明治18年(10)月 日	伊東方成	欠	第三回留学議会
19	164	明治(18)年10月6日	伊東方成	池田謙斎様	乙酉会開会迄
20	158	明治 年3月16日	伊東方成	池田謙斎様	ジーウラン氏馬車代
21	160	明治 年12月30日	伊東方成	池田謙斎様	隣家西郷殿
22	165	明治 年6月18日	伊東方成	池田謙斎様	高輪伊藤殿
23	166	明治 年3月7日	伊東方成	池田謙斎様	小生御代番
24	171	明治 年6月24日	伊東方成	池田一等待医殿	皇太后宮拝診
25	177	明治 年8月15日	伊東方成	池田一等待医殿	皇太后宮拝診
26	172	明治(18)年1月31日	伊東方成	竹内二等待医殿	忍命婦麻疹
27	174	明治 年8月17日	伊東	池田謙斎様	ベルツ氏御同伴
28	176	明治 年1月24日	伊東方成	池田謙斎様	秋本従五位殿一診
29	179	明治 年2月23日	方成	池田謙斎様	篤宮様御病氣
30	1274	明治 年12月17日	伊東方成	池田謙斎殿	荆妻生母死去
31	1275	明治 年2月14日	伊東方成	池田謙斎様	新樹典侍殿より
32	157	明治(19)年1月14日	伊東方成	池田謙斎様	侍医局改革之件
33	173	明治 年10月13日	伊東方成	池田局長殿	皇后陛下御眼疾